

2012年度私立大学図書館協会
国際図書館協カシンポジウム
龍谷大学 アバンティ響都ホール
(2012年11月9日)

大学図書館における学習支援を考える ～立命館大学図書館ラーニングコモンズ「BKCぴあら」事例紹介～



立命館大学図書館
イメージキャラクター
よむりす

立命館大学図書館サービス課
豊田 哲也

R RITSUMEIKAN

目次

1. 立命館大学について(参考)
2. 立命館大学が目指す教育の方向性
3. 「ぴあら」について
4. 「学習空間」としての利用状況と成果
5. 「人的学習支援」としての利用状況と成果

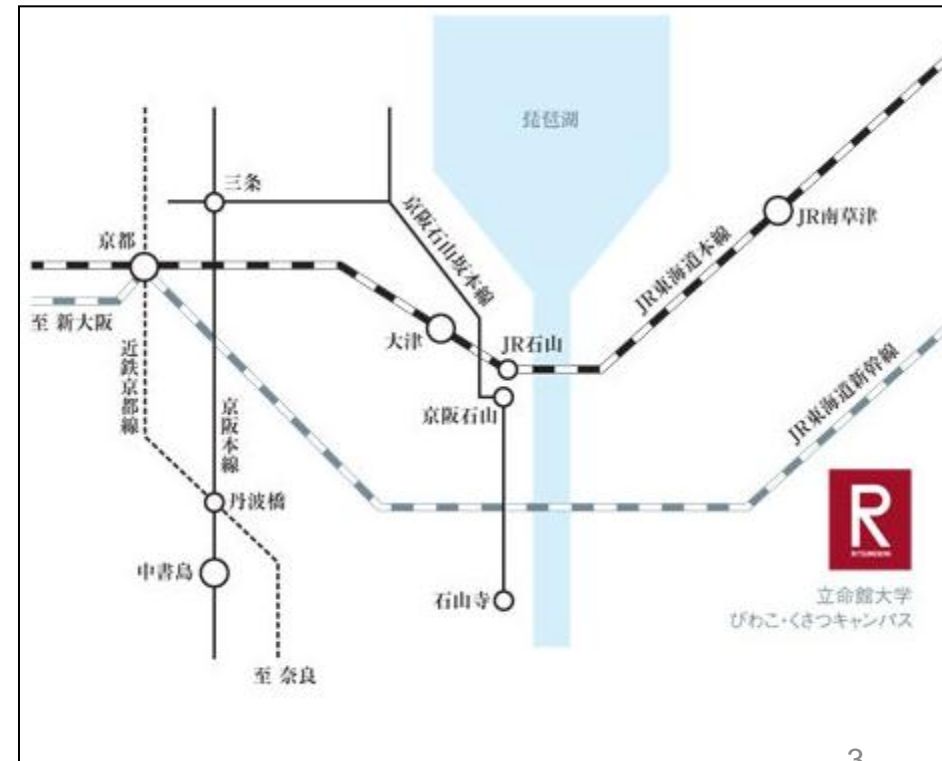
1. 立命館大学について(参考)

●京都

- ・衣笠キャンパス
- ・朱雀キャンパス

●滋賀

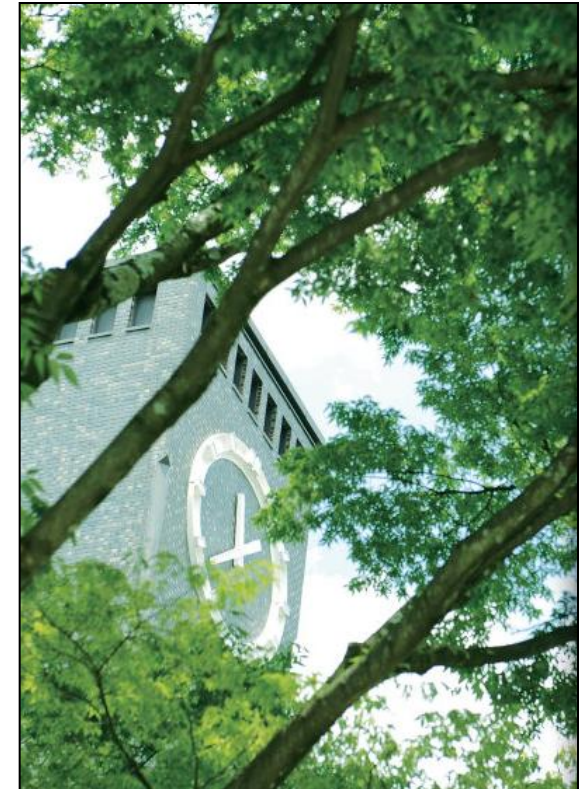
- ・びわこ・くさつキャンパス



1. 立命館大学について(参考)

●衣笠キャンパス(KIC)

学部	大学院
法学部 産業社会学部 国際関係学部 政策科学部 文学部 映像学部 国際インスティテュート	法学研究科 社会学研究科 国際関係研究科 政策科学研究科 文学研究科 応用人間科学研究科 映像研究科 言語教育情報研究科 先端総合学術研究科



在籍者数:学部生16,647名 大学院生927名

(2012年5月1日現在)

1. 立命館大学について(参考)

●びわこ・くさつキャンパス(BKC)

学部	大学院
経済学部	経済学研究科
経営学部	経営学研究科
理工学部	理工学研究科
情報理工学部	情報理工学研究科
文理総合インスティテュート	生命科学研究科
生命科学部	テクノロジー・マネジメント
薬学部	研究科
スポーツ健康科学部	スポーツ・健康科学研究科



在籍者数:学部生15,877名 大学院生1,841名 (2012年5月1日現在)

1. 立命館大学について(参考)

●朱雀キャンパス

大学院 専門職大学院
公務研究科 法務研究科 経営管理研究科



在籍者数:大学院生422名

(2012年5月1日現在)

はじめに

大学図書館における学習支援について考えるためには、各大学の基本計画、さらには、基本計画達成に向けた取り組み内容を踏まえ、大学図書館としてどのような支援を行っていくかを検討し、実践していく必要がある。

では、本学の場合は...

2. 立命館大学が目指す教育の方向性

立命館大学の基本計画

[基本目標]

1. 総合的人間力の育成を
2. グローバル研究大学へ
3. 教育、研究、学生生活を支えるキャンパスづくり

「学園ビジョンR2020」<http://www.ritsumeai.ac.jp/rs/r2020/outline/vision/objective.html>より引用
(最終アクセス日 2012年11月5日)

基本目標達成に向けた主な取り組み

[教育]

1. 入学初年次から4年間の一貫した小集団教育を充実させ、大学卒業時の「学びの質」を保証
2. 正課・課外にわたる環境整備、「学びと成長」のコミュニティづくり
3. 大学院教育の質向上
4. 各学部・研究科における国際教育を強化
5. 集団的な学びと学生の個を重視した支援体制
6. 課外自主活動、学生の主体性にもとづく「学びと成長」を支援
7. 自立的な学びと成長を支援する横断的な組織を設立

「学園ビジョンR2020」<http://www.ritsumeai.ac.jp/rs/r2020/outline/vision/objective.html>/より引用
(最終アクセス日 2012年11月5日)

基本目標達成に向けた主な取り組み

正課・課外にわたる環境整備、「学びと成長」のコミュニティづくり

1. 教員組織整備によるST比の改善と、教職員能力向上
2. 自学自習、グループ学習の場としての“学習図書館”構想を実現
3. 学生同士、学生と教員、学部生と大学院生をつなぐ共有スペースの整備

「学園ビジョンR2020」<http://www.ritsumeai.ac.jp/rs/r2020/outline/vision/objective.html>より引用
(最終アクセス日 2012年11月5日)

ぴあら開設前の本学図書館の課題

1. 「学び」を接点に交差する学習環境が図書館内に備えられていない
2. 高校から大学の学びへ学生がスムーズに転換できるための具体的な支援体制や空間の欠如
3. 学生が主体的に学んだことを発信する、協同学習で学びを深めるための環境設定が十分ではない
4. 教学部門との連携が不足している

これらの課題を解決し、図書館が学部を問わず学生の学びを支援するためには...



授業外での学びを可能にする空間や学びをサポートするための支援窓口や学習環境を提供することが必要

図書館の新しいコンセプト

●コンセプト

「立命館らしいラーニングコモンズ」の構築

具体的には...

- 学びだけではなく、その成果も発信していく空間として位置付けること
- 学びのあり方を受動的なものから能動的なものへと転換していく要の施設とすること

この2点を柱とし、この方向性を実現する場が「ラーニング・コモンズ」であると位置づけた。

図書館を《学びが見える、学びに触れる、学び合える場》
として変化させていくことを提案

コンセプトの具体化に向けて

●ターニングポイント

衣笠図書館内に設置された「マルチメディアルーム」のPCのリプレース

●各部門(図書館、教育開発推進機構)の思惑が一致(Win-Winの関係)

■ マルチメディアルームを管轄する教育開発推進機構の課題

- ・初年次における「丁寧な学習支援の必要性」への問題認識
- ・「学習支援」の遅れに対する課題認識



・図書館における「学習支援(ラーニングコモンズ化)」の課題認識



1. 「“新たな学習空間”と“学習支援体制の設置”に向けた全学委員会設置」
2. 本学の実態に即した(伝統的な強みであるピア・サポート含)、新学習空間の設置提案

⇒ 「ピア・ラーニンググループ(呼称:ぴあら)」の設置(2011.4)

3. 「ぴあら」について

「ぴあら」コンセプト①



●メッセージ:

仲間とともに学ぶ楽しさ『ぴあら』で新しい学びを

●コンセプト

- ・「主体的な学習者としての学びの転換を促すこと」
- ・「仲間(ぴあ:Peer)とともに学ぶ楽しさ、成長する喜びを感じる場であること」

●「ぴあら」のロゴに込めたコンセプト

「仲間(ぴあ:Peer)とともに学ぶことで得る、ひらめき・発見」

「ぴあらホームページ」<http://www.ritsumei.ac.jp/acd/mr/lib/plr/outline.html>

より引用(最終アクセス日 2012年10月31日)

「ぴあら」コンセプト②



●空間デザイン

立命館大学 経営学部 DML (Design Management Lab) との連携

→デザインの専門家からインテリア、什器、色彩設計、ロゴ、ポスター、
広報ツール等のトータルでアドバイスをいただく。

・「(色の)統一感」、「親しみやすさ」、「気軽さ」、「学習空間」の融合



単なる交流の場ではなく、「学習に関する出会いの場」を創出。
創造性を生み出す自由な空間でありながら、アカデミックな雰囲気を持

「ぴあら」の概要 ①



2キャンパス 合計3つの学習用図書館内に「ぴあら」を設置

●衣笠キャンパス

2011年4月 衣笠図書館に開設

●びわこ・くさつキャンパス

2012年4月 メディアセンター(理工系4学部)、メディアライブラリー(社系3学部)に開設。

→衣笠図書館「ぴあら」の成功事例を踏まえながら、BKC「ぴあら」独自の施設・サービスを展開

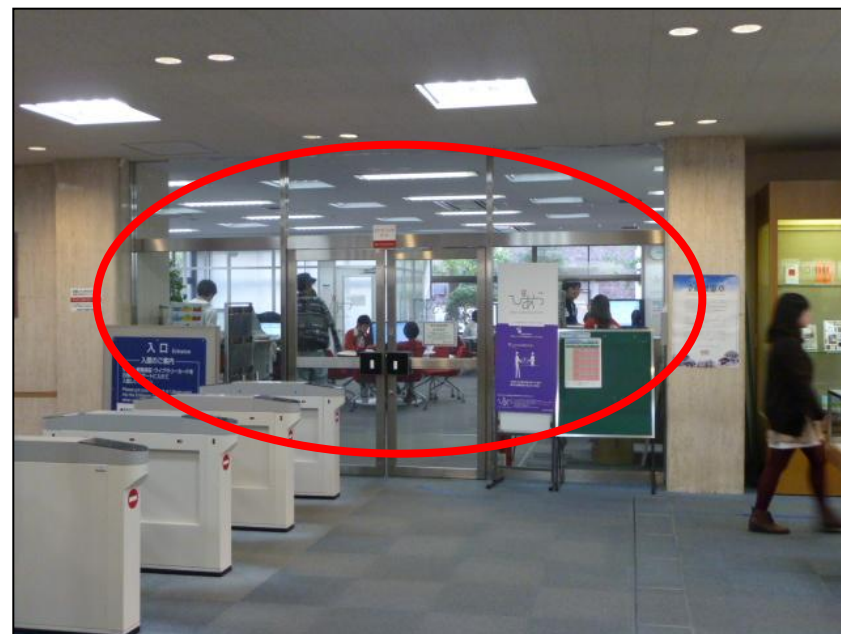


「ぴあら」の概要②-1

各図書館における「ぴあら」の設置場所

- 3つの『ぴあら』とも 各図書館の中で入館後すぐの場所に設置。
入口や図書館外からも学習風景が見え易い(可視化された)場所に設置

●衣笠図書館：面積約294㎡



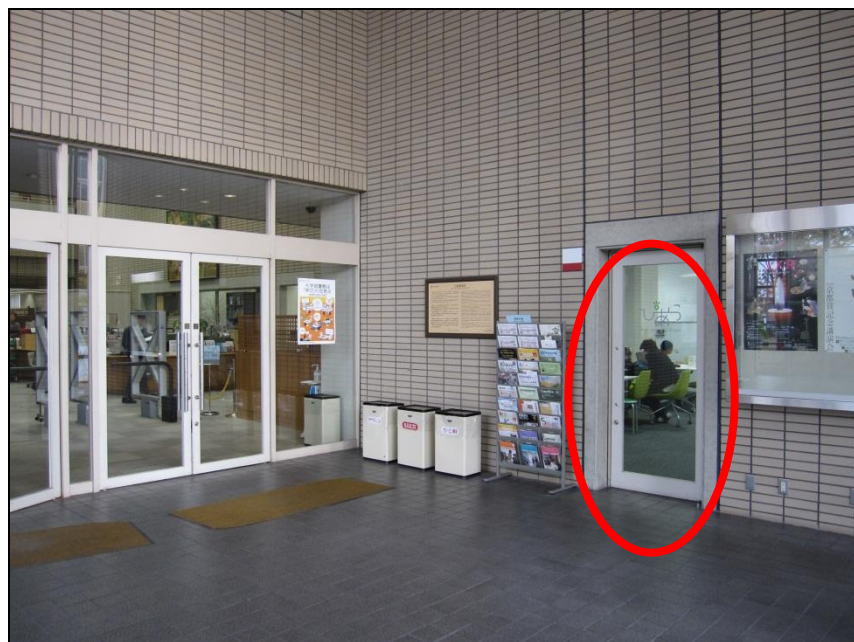
「ぴあら」の概要②-2



各図書館における「ぴあら」の設置場所

- 3つの『ぴあら』とも 各図書館の中で入館後すぐの場所に設置。
入口や図書館外からも学習風景が見え易い(可視化された)場所に設置

●メディアセンター:面積約174㎡



「ぴあら」の概要②-3



各図書館における「ぴあら」の設置場所

- 3つの『ぴあら』とも 各図書館の中で入館後すぐの場所に設置。
入口や図書館外からも学習風景が見え易い(可視化された)場所に設置

●メディアライブラリー: 面積約358㎡



「ぴあら」の空間



ぴあらの基本的な機能

①フリーエリア

ブレインストーミングや自由な発言で意見や感じたことを出し合い、相手の考えや感じていることなど、アイデアの創出に繋がるような空間。

可動式の机・椅子・ホワイトボード・プロジェクタ等を配置。

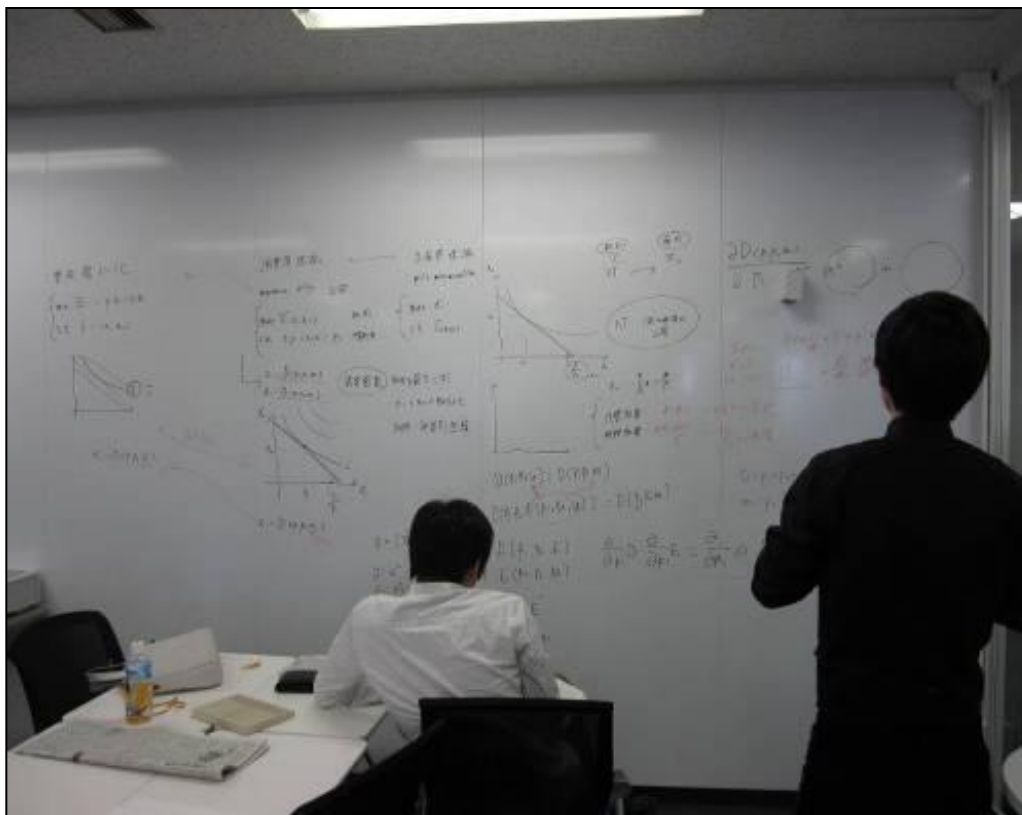


「ぴあら」の空間

ぴあらの基本的な機能

②プレゼンテーションエリア

ガラス張りで区切られた空間の中で、作り上げてきた成果を発表することで成果物を深化することができ、プレゼンテーションスキルの向上をめざす空間。



「ぴあら」の空間

ぴあらの基本的な機能

③ディスカッションエリア

持ち寄った資料を既設のパソコンをとおして大型ディスプレイに映し、グループで討論を重ねながらブラッシュアップしていく空間。



「ぴあら」の空間



ぴあらの基本的な機能

④カウンターエリア

学生スタッフが常駐し、「ぴあら」の各種利用サポート等を受けることができる空間。



「ぴあら」の空間



BKCぴあら独自の機能

①ファシリテーションエリア(メディアライブラリー)

ケーススタディのような実践的課題に取り組み、成果を発表し合うことを想定した、メンバー以外の自由な参加もOKとするオープンな場で、皆で議論し合えるスペース。



「ぴあら」の空間



BKCぴあら独自の機能

②ホワイトウォールエリア(メディアセンター)

頭に思い描いた数式・図式を広いホワイトボードに書き写し、複数のメンバーで共有し、議論することができるスペース。



「ぴあら」の人的支援



ぴあらの各種サポート

- ①IT・情報検索サポート(学生スタッフによるサポート)
 - ・ノートパソコンの貸出【衣笠のみ】
 - ・プレゼンテーションルームの利用予約【衣笠のみ】
 - ・ワープロ・表計算など基本的なアプリケーションの利用サポート【衣笠のみ】
 - ・ぴあら内に設置してある各種機材の利用サポート【衣笠のみ】
 - ・図書館のデータベースを利用しての情報検索サポート

- ②数学・物理・化学・生物学習サポート[メディアセンターのみ]
 - ・理系学習支援体制のランチ的機能

- ③日本語ライティングサポート[衣笠、メディアライブラリー]
 - ・正課授業との連携(前期)



メディアセンターぴあら学習サポートの様子

「ぴあら」の人的支援



数学・物理、化学・生物学学習サポート

※体制は2012年11月5日時点

①数学

【曜日】月～金

【時間帯】15時～18時

【講師】専任講師、任期制講師、嘱託講師、大学院生 等

②物理

【曜日】月～金

【時間帯】15時～17時

【講師】任期制講師、非常勤講師、大学院生、学部生 等

③生物・化学

【曜日】火・水・木

【時間帯】18時～20時

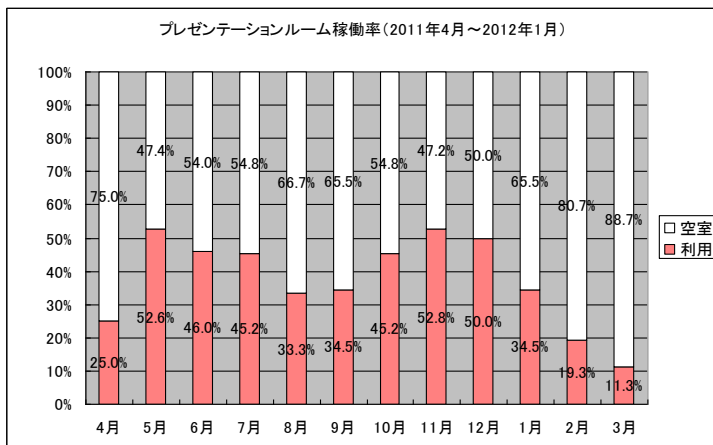
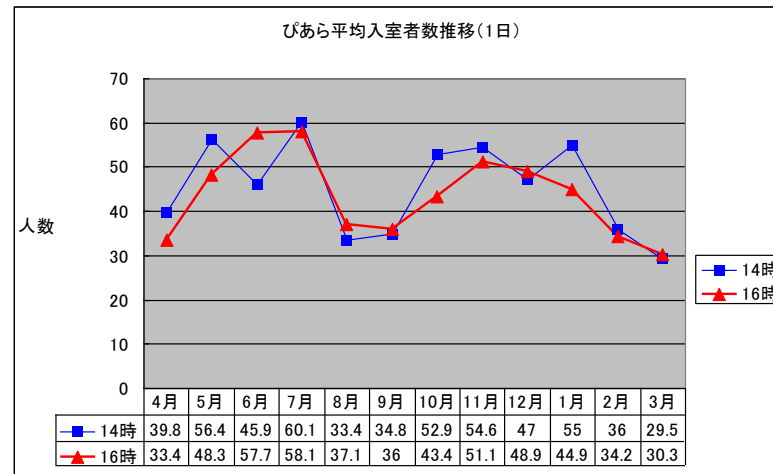
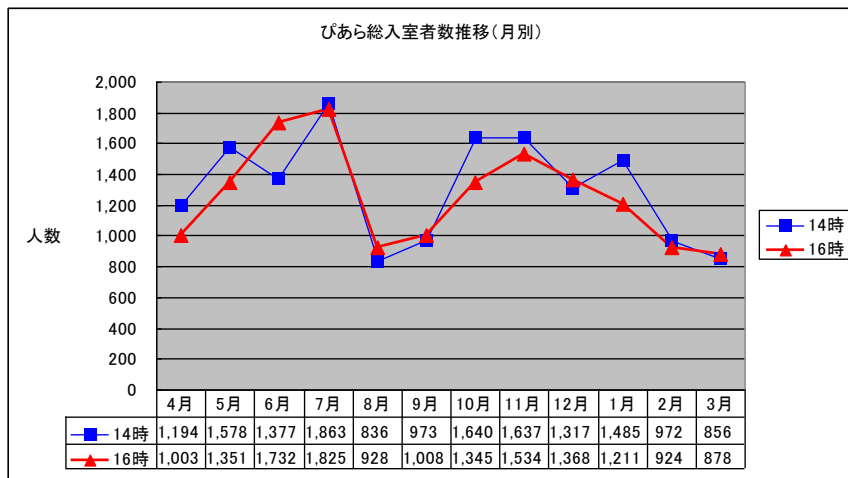
【講師】生命科学部・薬学部の助手や大学院生 等

- ・平日の午後以降、常に教員や大学院生が常駐しているという環境
- ・ぴあら開設時の雰囲気作りにもプラスに大きく貢献

4. 「学習空間」としての利用状況と成果

「学習空間」としての利用状況①

2011開設1年目の状況(KICのみ)



開設1年目当初から、利用者は順調

- ・総利用者数は3万人越
- ・平均利用者数約45名

(全席数約100席/14時と16時の利用者数として)

- ・プレゼンルームも5-7月、10-11月には平均約50%程度の稼働率

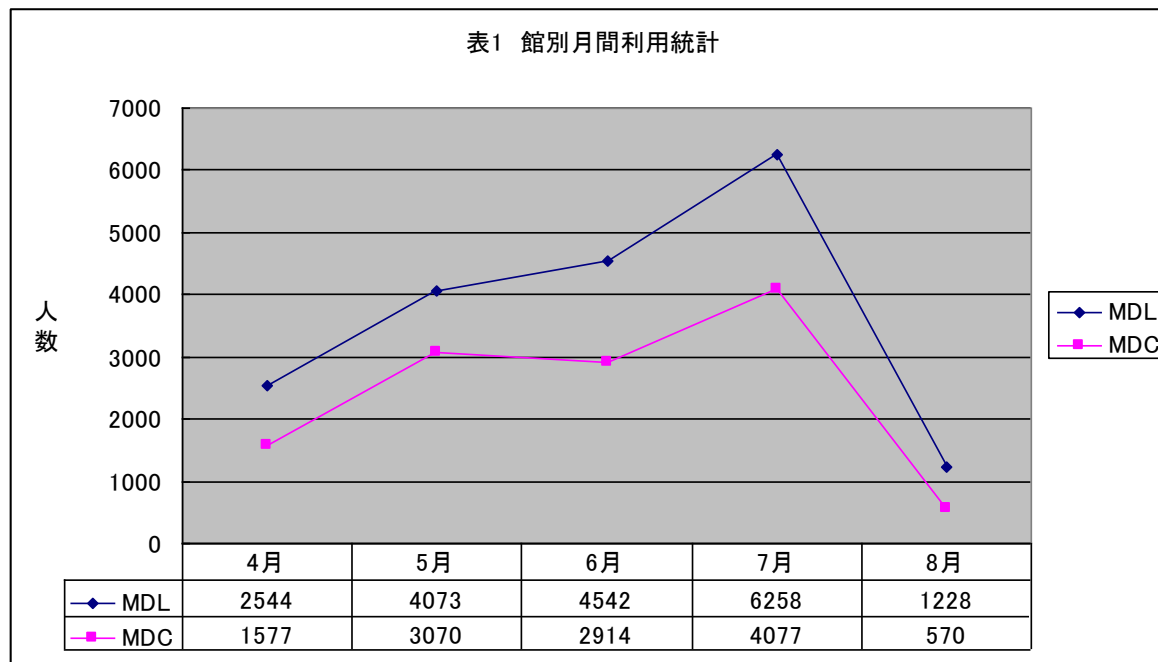
2時限目以降6時頃までは、いつも混み合っている様子

【定点観測方法】

□人数: 観測した時間に、ぴあらにいる総人数(10時～20時までの2時間刻みで観測)

「学習空間」としての利用状況②

2012開設1年目の状況(BKCのみ)



本当に満席状態で学習サポートを受けたり自習やグループワークをしている様子が頻繁に見られます

開設5ヶ月
総利用者数
30,853名

メディアライブラリー
18,645名

メディアセンター
12,208名

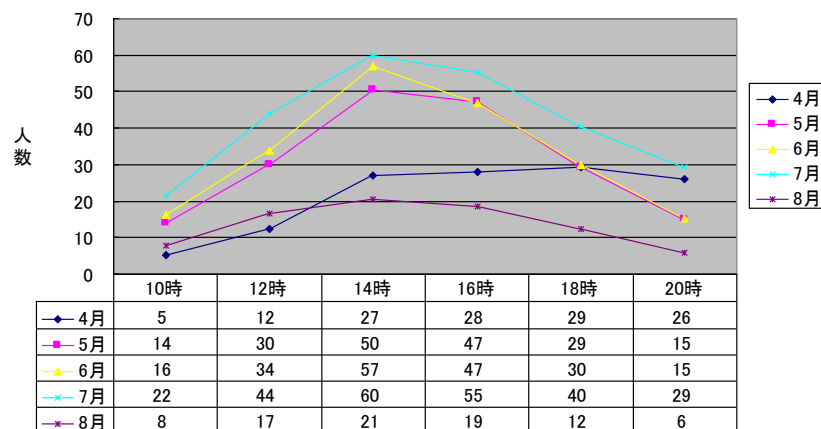
開設当初から、BKCも利用者は順調

▶総利用者数は3万人越

「学習空間」としての利用状況③

2012開設1年目の状況(BKCのみ)

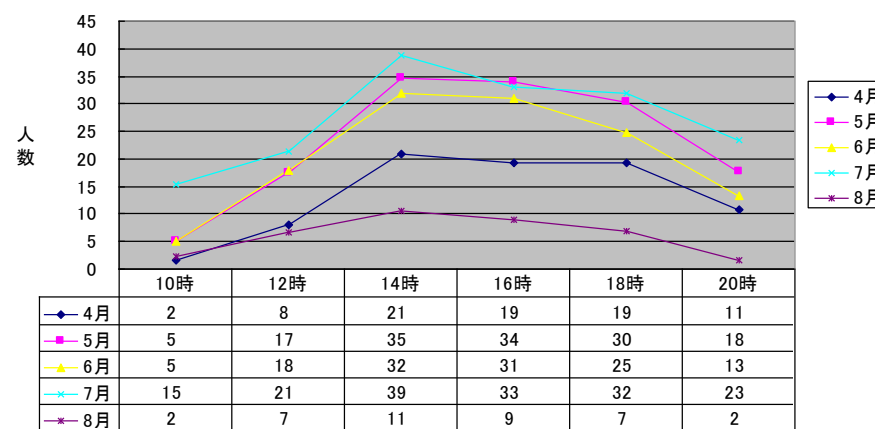
表2 MDL時間別平均利用人数



▶平均利用者数

- ・メディアライブラリー約60名
(全席数約100席/7月14時)

表3 MDC時間別平均利用人数



▶平均利用者数

- ・メディアセンター約39名
(全席数約64席/7月14時)

「学習空間」としての成果

① InputからOutput、Outcomeのトータル支援

- ・学生が学習目的に応じて使い分けができる

→ **個人学習・協同学習**の両方のニーズに応えられる空間の提供

② comfortableな環境

- ・ぴあらの空間デザインの統一感、開放感により、利用者がリラックスした雰囲気
で学習できる。

→ **長期滞在**できる空間の提供

③ 学びの可視化

- ・「学習する姿を周囲に見せること」を肯定的に捉える学生にとって、学びを
「可視化」する学習空間は学びへのモチベーションに繋げることができる

→ **学びの相乗効果**が期待できる空間の提供

5. 「人的学習支援」としての利用状況 (現状と課題)

「人的学習支援」の取組と利用状況①

●「数学・物理学学習サポート」「化学・生物学学習サポート」 (メディアセンターのみ 2012年4月～)

- ▶ 学部生、院生、講師、教員(*教科により支援者は異なる)による、授業の復習、必要な用語や公式の理解のサポート等、関連するよろずサポート
- ▶ 2006年度～学部・学科単位の自発的取組みからスタートした学習支援「物理駆け込み寺等(本体)」に対するブランチ的な役割(「必要に応じて繋ぐ」or「新入生等の学習喚起」)を果たす

●2012年度4月～7月<半期> 利用者延べ数 (以下、数学と物理のみの数値)

教科	教室(本体)	ぴあら (メディアセンター)	合計
数学	約180名	約420名	約600名
物理	約860名	約340名	約1200名
合計	約1040名	約760名	約1800名

▶ 2011年度「年間」の利用者数約1800名を大きく超える見込

→「ぴあら(ブランチ)」で学習サポートが行なわれたことにより教室(本体)も含めた総利用者増加!

→幅広い学部、回生が利用

→人的学習支援が行われることで、「ぴあら」内のアカデミックな雰囲気作りに貢献!!

「人的学習支援」の取組と利用状況②-1

●取組状況「ライティング・サポートカウンター(日本語)」

(2012年5月～両キャンパス)

▶一定の研修を受けた院生が、全学部横断型(開講は学部任意)の初年次教育科目

*「アカデミック・リテラシー【日本語の技法】」と連携した、授業外学習支援の取り組みとして、全学生を対象としたアカデミック・ライティングの基礎的支援を行う

*「アカデミック・リテラシー【日本語の技法】」におけるレポート課題に関する概要

- ① 15回の授業の中で、8回と最終レポート課題で合計6000文字のレポートを課し、院生が添削して返却
- ② 添削には「課題評価のルーブリック」を使用し、受講生、担当教員、添削院生で到達目標と不十分な箇所の確認・共有が行えるような仕組み
- ③ 添削内容が分からなければ、『ぴあら』にいくように案内

ライティングサポート_課題評価のルーブリックの一部 (例)

課題評価のルーブリック(4) 【課題7・8】

評価基準	0	1	2	3
①誤字・脱字がなく、語・語句が適切に使われており、表記の形式的ルールが守られている。(語レベル①②)	誤りや無駄がかなり目立つ。	数カ所の誤りや無駄がある。	一、二カ所のケアレスミスはあるが、ほぼ間違いがない。	一カ所も誤りがなく、的確で魅力的な言葉が使われている。
②文体が統一されており、一文一義のわかりやすい文で書かれている。(文レベル③④⑤)	誤りやわかりにくい文がかなり目につく。	数カ所の誤りがあり、わかりにくい文がいくつかある。	一、二カ所のケアレスミスはあるが、ほぼわかりやすい文になっている。	一カ所も誤りがなく、わかりやすい文になっている。
③接続語を適切に使い、文相互の論理関係が明確である。(文相互の関係レベル⑦)	論理関係がわかりにくい。	数カ所の接続語の用い方に不備があり、論理関係にあいまいさがある。	一、二カ所の接続語の用い方に不備はあるが、ほぼ論理関係にあいまいさがない。	接続語の用い方も適切で、文相互の論理関係が明確である。
④パラグラフが構造化されている。(パラグラフレベル③④)	パラグラフ構造化の認識にかなり弱さがある。	パラグラフ構造化の認識はあるが、構造化されていないパラグラフがいくつかある。	一、二カ所のケアレスミスはあるが、ほぼ構造化されている。	パラグラフが明確に構造化されている。
⑤主張が明確であり、文章全体が論証文(トールミンの議論モデル)のフォーマットに則って構造化されている。(議論レベル⑧)	論証構造化の認識にかなり弱さがあり、根拠・主張・論拠のいずれも弱さがある。	論証構造化の認識はあるが、根拠・主張・論拠のいずれも弱さがある。	根拠・主張・論拠のいずれか一つに若干の弱さがあるが、反証や限定も書かれている。	主張が明確であり、文章全体が説得力のある構造化となっている。
⑥図表やグラフから必要なデータを選り分け、文章で理論化している(明確で分かりやすいストーリーに置き換えられている)。	データの選り分けが根本的に間違っており、まったく理論化できていない。	必要なデータの選り分けはできているが、理論化が不十分である。	必要なデータを選り分け、文章で分かりやすく、ほぼ理論化できている。	必要なデータを的確に選り分け、文章で分かりやすい独自性のある理論化ができています。

評価項目

- ①適切で明瞭な語や語句、記号を用いる。
 - ・「わたしは」で文を始めない。
 - ・意味なく同じ表現を繰り返さない。
 - ・「…と思う。(と感じる。と考える。と思われる。)」 「…ではないだろうか。」といった不確定な表現をとらない。
 - ・誤字脱字の多い文章を書かない。
 - ・漢語をひらがなで書かない。
- ②《用語の訛り》に注意する。
 - 注 《用語の訛り》とは特殊な学術用語やカタカナ言葉、略語、方言、話し言葉など「仲間内ではわかるがよその人間には意味のわからないような不適切な言葉づかい」。
- ③文体(です・ます体 or だ・である体)を統一する。
- ④一文一義を原則に、一文はできるだけ短く書く。(一文は原則的に50~60字以内とする。)
- ⑤修飾語と被修飾語を近づける。
- ⑥係り受けの関係を照応させる。
- ⑦接続表現を使い、文相互の関係(論理関係)を明瞭にする。
- ⑧ピラミッドをつくる。(一つのピラミッドは一つのヒロキセキスと複数のサポーターで構成する。)
- ⑨論点(問い)と主張(答え)を明確にし、主張は根拠と論拠でサポートする。
- ⑩トールミンの議論モデルをフォーマットにする。

「人的学習支援」の取組と利用状況②-2

●利用状況(結果)「ライティング・サポートカウンター(日本語)」

▶ 2ヶ月半の開設(1-2コマ程度/週)の合計利用者数は60名程度と低い結果

▣ 利用しない理由(アンケートの一部より):

＞ 相談の必要性を感じない ⇒ 添削内容に満足? 十分に添削結果を省察出来ない?

▣ 相談の発生時期:

＞ テーマを自ら設定をしなくてはならない最終レポートを作成する時期になりようやく相談者が増えてきた ⇒ それまで与えられた課題はこなすだけになっていた?

その他「IT・情報検索サポート」カウンター(2011年4月～)

▶ ピア・サポーターである、「ライブラリースタッフ」、「レインボースタッフ」によるIT・情報検索・『ぴあら』利用サポート

「人的支援」としての成果

① 教学部との連携強化（図書館）

- ・教育開発支援課や関連学部との連携が強化できたことで、今後「ぴあら」での様々な学習支援を行う可能性が広がった。
- 2012年度後期からはBKCで新たに「電気電子系相談会」や「ゼミナール支援」をぴあらで実施。

② 学習支援の利用者増加（教学部）

数学・物理等学習サポートより・・・

- ▶混雑時には順番待ちが出る程
 - ▶専用の支援スペースがなかった昨年度までと比較して利用者が伸びている
 - ▶中でも利用者が比較的多くなかった数学・化学・生物の利用者が急増している
- 学内に分散する学習支援やその他様々な各部門の人的支援体制（ランチ機能を含む）を集積することの相乗効果が期待できる



ご清聴ありがとうございました

